

昭和三十四年七月二十三日第三種郵便物認可  
昭和三十二年六月二十五日發行(每月一回・十五日發行)

(通第八十七号)

目  
思想解決の要鍵……………近角常観……………(1)

近角先生の御提撕を頂く……………花田正夫……………(8)

次  
東方偈に就いて……………福島政雄……………(10)

# 慈光

第八卷

第六號

# 思想解決の要鍵

近角常観

今日の種々の思想問題が起つてゐるのを、徹底して解決すべき要鍵は何であるかについてお話ししてみようと思ふのであります。この題を信者の人々にもよくわかるやうにいふならば、信心を決定する事はなか／＼むつかしいが、如何にして信仰に入られるかといふ問題であります。

思想解決の方法として大体に二つにわかれてゐる。一は一定の規則を以て、あ／＼せよ、かうせよといふやうに、それによりて行はせてゆかうといふ方法である。然し私共の心はさう教へられてもなか／＼その通りに行はれるものではない。故に、も一は思ふまゝに、氣の向くまゝにやつて行かうといふやうになる。今日一般の傾向を見るに、いづこも自由に思はく通りにやろうといふ風が多い。然し、一定に切り揃へるやりかたでは、なか／＼人々はいふ事をきいてはくれない。さればとて氣儘にやつて行くのではほんたうの事にはならぬ。それでは一体どうしたらよろしから

り易い。他力本願の教を聞いても、言葉通りに聞いてその通りにやらうとしてもなか／＼出来ぬ。そんなことをするのはではない。然らばとて勝手にするのはない。

親鸞聖人は法然上人に似よりもせぬ事をされた。法然上人は清僧で念仏をすゝめられたのに、親鸞聖人は肉食妻帯で信心をすゝめられた。まるで正反對のやうだと思ふ人もあるが、私共の考へは自分の思はく通りにやるのでは安心はつかぬ。

法然・親鸞両聖の關係は捷通りに從はれた親鸞聖人でもなく、さればとて勝手氣儘にされたのではない。何を聞かれたのかといふと、法然上人の教化は

『弥陀如来の選択本願は、罪深く障多く、浅ましき私に如来は大慈大悲の御心を以て、そのものをやるせなく仰せらるる御真実の深きものであるから、心まかせにしては何処までも勝手氣儘に流るる私なれども。かういふ私をあはれみましまして、そのものを何処々々までもやるせなく仰せらるる御真実である』

といふ事を聞いて、この御真実に頭を下げて、真に心から信順するといふのが、法然上人の仰せを聞かれた親鸞聖人の態度であります。

故に今日の思想問題も杓子定規で解決されるものでもなく、氣儘放縱で解決されるものでもなく、私共に如来の真

うかを考へねばならぬのであります。

これには、法然上人と親鸞聖人との關係を見るのが最もよい。

親鸞聖人は、法然上人が『念仏をとなへよ。南無阿弥陀仏一つだ』と仰せられたのを、そのまゝありがたく信せられたのである。

法然上人が『念仏を称へよ』と仰せられたのを聞いて『称へよと仰せなされたから称へるのだ』と言葉通りに從ひ、言はれた通りにされたのが三百八十余人の他の御弟子達である。即ち法然上人が戒律を保つて居られるから自分も保つのだと、法然上人を手本とし尺度として行はれたのであつた。故に外形は法然上人と同じであつても真に上人の思召を頂かれたのではない。

今日思想問題に於ても規則通りに行はんとしてもなかなか出来るものではなく、よしや出来ても所謂杓子定規にな

実を聞かせてもらふ事によりて初めて心から信順することが出来るのであります。この真の心から信順する処の信心一つあらば、それにて私共の人生の思想問題の解決が出来る、これが要鍵であります。信仰の問題を實際上の思想問題に応用さへすれば、正しく解決されるのであります。

今日お集りの人々には題があまり適切でないやうであるけれども、私共の心の問題がすべて思想の問題であるからこれを深く私共の心の中に頂けばよいのであります。歎異鈔の第十六章はこの問題の解決である。

『信心の行者自然に腹をもたて、あしざまなることをおかし、同朋同侶にもあひて、口論をもしては、かならず廻心すべしといふこと、この条、断悪修善のここちか』

『私共が喧嘩口論をするのは自然にやる事だから仕方がないのだ』といふ一方の論者に対して『それはいけない。いち／＼廻心懺悔して心をと直してよくせねばならぬ』といふ論者がある。さきのは氣儘のままに通す人で、あとのは拵的にやかましくいふ人である。これはどちらも真の生活ではない。

ここに一つ真実の道がある。それは何であるか。全体一

度一度廻心せよといふのは、悪を断じて善を修める心であらうが、これは私共の力ではとても出来る事ではないのであります。

『一向専修の人においては、廻心といふこと、ただ一たびあるべし。その廻心とは日ごろ本願他力真宗を知らざる人、弥陀の智慧をたまはりて、日ごろのころにては往生かなふべからずとおもひて、もとのころをひきかへて、本願をたのみ参らすこそ、廻心とはまうしざらへ。』

悪心をよくせよ。あゝせよ、かうせよといふのは、自分の力で氷をとかしてしまひ、自分で善に向へよと勧めるのである。

又一方の自然だといふのは、氷は氷でしかたがない。悪いのは悪いでやむを得ぬのだと打ちすておくのである。これでは安心は出来ないであります。

ひやゝかな氷は、自分の方では解かす事は出来ないけれども、春の光で、何処々々までも解かしてしまふといふ光があらはれた時には、いかに冷やかな氷も遂に解けて、温かき水になる。他力の味ひはこれでありませう。私共の心は冷やかな浅ましき汚ないものであるけれども、それをてらす

如来の光のために解けずに居られぬといふのが廻心といふ事である。

信心のお話は聞きやうによつてはすこしも聞えない。自分で有り難いと思つたのが信心といふならば、自分の力で氷が解かされると思ふのである。私共は冷やかな心で、とても喜ぶ事は出来ない。他人をこそ冷せ、温かくする事は出来ない。

故に私共の心の上に温かな有り難い心が起るのだと思ふならば、それは誤りである。故に此の度は、今日まで有り難くなるのだ、温かになるのだと思つたのはあやまりだつたとわかつたとした処が、それだけで信心だといふのではない。

信心とは、自分で温かくなるのでもなく、冷かなままで打捨てておくのでもなく、さういふ冷かな私に、つめたい私に、人をこそひやせ、温かくする事の出来ない私のこの心に、どこ／＼までも温かな心で向つてくれる人があれば、それで私共は助かるのであるが、しかしそのやうな人は人間にはない、ないからこまるのであります。

人間の中にそんな人のある筈がない。いかに親切な人もほんとの頼みにはならない。自分が人に親切にするにしても、ほんたうにはそれが出来てゐない。して見れば自分で

喜び、自分で温かくなることは出来ないけれども、私共のかかる有様な事を察し、あはれみ、同情して、よしんば私共がいかに冷かな心にて温かなお慈悲の光に向つても、きはまりのないひかりのためには、遂には冷かな氷も解かされてしまふのである。

『日ごろ本願他力真宗をしらざる人』とは、かういふ仏が居て下さるとの事を知らなかつた人の事でありませう。

『弥陀の智慧をたまはりて』とは、かういふ御真実を聞かせて貰うた一念が智慧をたまはる一念である。

『日ごろの心』とあるは、今迄は自分であたたかになりて安心するのだとか、このまま打捨てておくのだと思つてゐた心をいふのである。私共の心は皆この二つで、いつまでたつてもこれでは安心出来ない。この安心のならぬ私共の苦しい心根を察しあはれみて、やるせなく思召す大慈大悲の御真実ひとつで救はれるのであります。

私共が、あせねばならぬ、かうせねばならぬと、廻心しようと思つてする廻心は真の廻心ではない。自然のままにまかすといふのもほんたうではない。如来がさういふ私を憐んで下さる御真実を聞かせて貰つた一念に、私共のひややかなたけそれを同情し、悪しきだけそれだけ憐みて、どこ／＼までも見捨てぬとの御真実がいたり届いた処が一念であります。

このやうに言葉でいへば易いけれども、どうしても逃げてそれが頂けない。譬へば、息子が病氣になれば親としてはどうかして子を助けたいと思ふし、子は親にすがりたいし、本復したい、させたいといふのが人情である。故にあたりまへの人情にては、子は親のため、親は子のため、死んでも死ねぬとまでに思つて身を大切に苦勞する。然しこれ程の思ひでやつても、助からぬものはどうしても助からぬ。このどうすることも出来ぬ処が所謂氷である。人間の力でこれがやれるのなら氷ではないけれども、親として子を助ける事も出来ず、子としてはよくなる事も出来ぬ、ここが氷である。

『いよ／＼どうにもならぬ。これだから如来様ばかりだ』といふのでは、氷で冷かだといふだけで。それでは安心がついたのではない。仕方がなくなつたからとて仏につきやつたのではまた安心は出来ない。

『親の力でも、子の力でも、人間の力にては及ばぬとのこの悲しき苦しさを察して、さぞ苦しんだらう、淋しいだらうと、これを何処々々までも隣み、同情して見捨てるに見捨てられぬとの大慈大悲の広大なる御真実だ』といふので、初めて氷が解けてしまふのである。

私共は親に、あせねばならぬ、かうせねばならぬと、提的にやりたいと思ふけれども、それは出来やしない、私共には出来ぬけれども、親の真実は見すてずに、何処々々

までも呆れぬといふのである。非常に氣儘な仕方のない私を、親はそれほどにやるせなく仰せられるといふ御真実、これで安心するのである。

これは仏のまことを親にたとへたのであります。人間の力ではどうする事も出来ないといふのが氷である。この氷をどこまでも解かさねばおかないといふのが春の陽光である、如来の慈悲の光であります。

私は世間の思想について色々の訴へをきくのであります。中には、自分の力で人々にやさしくし、人々を救ふといふやうに、自分の方でよくするのだといふことで誤りが出来てゐる。人にやさしくする事が信仰の行ひだと思つて、人にした事が却つてためにならぬ。自分に出来ない事を企ててゐたので、自分が氷である事を気付かず、自分が仏様の如きものだと思つてゐるのであります。

私にしても初めは、自分はよいと思つてやつてゐるのに向ふがよくない、ひややかだとのみ思つてゐた。然しかういふことをいふのがすでに自分が冷かなのだと気がついた。即ち自分は金剛石だけれども、向ふの石や瓦で傷つけに来るから、自分に傷がつき砕けたといふのなら、自分はずでに金剛石ではない、似せものだったのであります。ここに氣づいてからは、これではつまらぬ、いけないと自分を悲しみて、よくしようとしてもよくならぬ。

らふべくば、人の命は出づる息、入るをまたずして終ることなれば、廻心もせず、柔和忍辱のおもひに住せざらんさきにいのちつきば撰取不捨の誓願は空くならせおはします(す)べきにや。』

普通の人々の考へでは、如来の御真実はありがたい、然しこんなにあさましくてはいけない、つめたくてはいけないと思ふ。故に、

『口には願力をたのみ奉るといひて、こころにはさこそ悪人を助けんといふ願不思議にましますといふとも、さすがよからんものをこそ助けたまはんとすれと思ふほどに、願力をうたがひ、他力を頼みまらす心かけて、辺地の生をうけんこと、もとも歎き思ひたまふべきことなり』

かういふやうに安心が出来ないとなりますのであります。昨日もある人が『どうも私は信心が得られません』とて苦しんでゐる人がありました。

私がいふには『信心を得たいと思つても得られない。得られないから心淋しい。この心を察して、無理のない事だと真に見て下さるのが如来の真実である』と話した事でありませぬ。

いよ／＼となればどうする事も出来ない、このなやみ苦

さうなると、さういふ氷のかたまりなる自分に対して、自分の冷かな事に同情して、どこ／＼までも融かさねばおかぬといふ広大な御真実にあへば、そこに初めて融けるのであります。

この御真実で融けるといふのを、私共は心で融けると思つてゐたのが誤りのもとであつたのであります。自分の力ではどうする事も出来はしない、氷は永の力ではとけない。又この御真実を人間同志の中に求めてゐなければ、人間の中にはそれは決してありはしない。この広大なめぐみは、仏よりほかにはないのである。

信心の話を聞いて温かく感ずるのを、自分の心だと思つたり、又は自分が冷かだ、人が冷かだと、歎いたり、不足をいふのも、これは自分の力でさうするのではなく、人生はそれほど冷かな、思ひのままにならぬ、頼みすくないといふ事を、どこ／＼までもやる瀬なく思召すのが如来の御真実、めぐみのひかりであります。

不平や苦しみのあらん限りどこ／＼までも憐み給ふ御真実であるから、あくまで如来の方がまけない。私の冷かな心と、如来のまことと、いづれが勝つかといふ事により、信仰が徹するか否かといふ事がきまるのであります。

『一切のことに、あしたゆふべに廻心して往生をとげさふ

しみをどこ／＼までも察して下さる広大な御真実である。が、それでもよくしたい、病気をなほりたいと、自分の思ひの方をたてれば、如来のお慈悲は聞えない。

然しどうしようと思つても、どうにもならぬ処をなほさう憐み給ふのだといふ御真実を聞いた時に、かくまで広大な御真実かと、聞く一念に、初めて如来のお慈悲の光りに氷がとけるので、これが信心決定であります。

私共の及ばぬ処をかくまでに仰せらるる御真実に安心して、どうならうとも、かうならうとも、如来の御真実に打ちまかせて、それに信順する事によつて、衷心より有り難うとなるのである。

親鸞聖人が法然上人の仰を聞かれたのがこれでありませぬ。歎異鈔の第二章には

『親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられまらすべしと、よきひとの仰せをかうぶりに信するほかに別の仔細なきなり。念仏はまことに浄土に生るるたねにてはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかさねまらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候。……』

これが聖人が如来のめぐみ、法然上人の仰せに信順せられたのであります。

最後に、仏の心とは、親の心である。親心とは親が私共の病氣を見て、他の食物がたべられぬからとて特に粥をこしらへ、他の衣服が着られぬからとて、打織の衣服をこしらへて下さつた。親の与へられたる真実のまごころが粥となり、手織りとなつた。

然るに子の方では、健康だから固い食物もたべられる、よい衣服も着られると思つてゐるから、親の真実がなかなかわからない。強いて親の言葉のままに従ふとすると、親がすすめるから食べねばならぬ、着なければならぬと思つてするので、心の底から親の思召が有り難くてするのではない。

世の中に教は多いけれども、かうせねばならぬ、あゝせねばならぬといふのではそれは出来ない。その拳句は勝手にやつて行くといふやうになりて、勝手にたべ、勝手に着るといふのでは安心出来ない。

けれども、いよく親のさういはれるわけを聞けば、他のものが食べられたり、着られたりするならば、粥も手織のものもこしらへはせぬが、お前にはそれは出来ぬから、お前一人のために、どうかして食べさせたい、着せたいと思つて用意したのだと、親の真実を聞かされた時には、それほど

## 近角先生の御提擧を頂く

花田正夫

『思想問題解決の要鍵』の近角先生の御講話は、大正六年の『法蔵誌』に記載されたものであります。この頃すでに歐洲の大戦中で、日本も連合軍に参加し、そのためにむしろ漁夫の利を獲た時代であります。国内の思想は混乱し、大正七年には米騒動が各地におこり、当時中学生だった私共も麦と外米の臭いものはかりを食べながら非常に不安な生活をしたことを覚えて居ります。その一方では船成金といふ者が横行濶歩した頃で、多数の読者の方々の記憶に今なほあきらかなことでありませう。

斯うした時代にあつて、世間の不安と動盪を、先生自身の問題とせられて、やむにやまれぬ御心から、その根本の解決の道を提唱して下されたのが『思想解決の要鍵』と題された御講話であります。

さて思想の問題は色や形は、時代と場所によつて変わりますが、その中心の問題点は、千年萬年、軌を一にする

までに親が私のために心配をしてくれたのかと気がついたならば、今迄自分は他のものが食べられる、着られると思つてゐたのはあやまりであつたと、それほどまでに仰せられる真実であつたかと、一点親の御真実が頂かれて見れば、初めて喜んで粥をたべ、手織の衣服を着られるのであります。自分をかほどまでに思召すかと、心の底に徹した処が信心である、決定である。有り難いと心から広大の仰せに信順し心服する処が即ち思想解決の要鍵であります。

大正六年十一月法蔵誌所載。

## 染香人の香氣 里耳譚

『大論』の譬に、香を買ふ者も売る者も、匂ひを身に受けることは勿論にて、傍觀の者も亦その匂ひをうるといふことあり。法を聞く者の為と思はず、言ふ者もその聞く者を目宛とすれども、傍に聴くもの覺えずその益をうるなり。

撰津国の耳四郎が白河の御房へ偷盜に入りて、椽の下にて宿善のひらけしためし思ふべし。兎角いふも語るも、何となくその傍にあるも、皆大悲の匂ひをうることを喜ぶべし。これ豈に私の力ならんや。されば『染香人のその身には、香氣あるが如くなり』と曰へり。

ものであります。そこにすでに四十年も過ぎ去つた大正六年頃の先生の御提擧が、現在只今の私共に思想問題解決の黄金の鍵として大きな光明を放つのであります。

『道はもつとも古くして日々常に新しい』といふ俚言も想ひ併せられます。

最近までの日本は長い戦争の間、律法主義、全体主義の支配下にありました。敗戦と共に一切の国内の権力が解体されて、西洋の、自由主義、自然主義に傾き、所謂単なる煩悩肯定主義を謳歌する状態となり、その反動的勢力は何処まで行くことかと思ひましたが、戦後十年、独立国の名を獲て、やうやく極端なものがすこし是正せられて参りました。

そこに振子が右に左に絶え間なく振動してやまぬ如くに、自然主義と律法主義との両極の間を、時の勢で、ゆききして居り、何処にも解決はついて居りません。

其の間、右傾の人は左傾をのりしり、左傾の人は右傾を

罵倒し、『我是なり、他非なり』の斗争が続き、独善独断の邪見が火花を散して居ります。

これが私共の現に住む日本の現状であります。そしてその思想の解決の道に迷うてゐるのが私共の姿であります。先年来、文部大臣が代々、あまりにも放任に流れるのを見かねて、修身教育の必要を提唱しましたが、昔の如き律法主義になる怖れがあるといつて、議会で否決せられ、結局は成り行きに放任するといふことになつて居ります。

さてこの現情下に、近角先生の御提擧が唯一無二の鍵として光を放つのであります。

『一定に切りそろへるやりかたでは、なか／＼人々はいふ事をきいてはくれない。さればとて気儘にやつて行くのではほんとうの事にはならぬ』

とは、心憎いまでに現在の日本の姿を言ひあてて居られるのであります。そしてまたこれは大きくは世界全体の状態であり、小さくは我々の家庭生活の上に日々夜々直面する問題であります。

その解決の道は

『私共のかかる有様を察し、憐み、同情して、よしんば私共が、いかに冷かな心にて、仏の温かな慈悲の光に向つても、無限の光のためには、遂に冷かな氷も解かされ

て了ふのである』

と単刀直入に御示し下さるのであります。「日頃本願他力真宗をしらざる人」とはかういふ仏が居て下さることを知らない人のことでもあります。

この近角先生の御勧めこそ、聖徳太子の『篤く三宝を敬へ。……人はなはだ悪しきものすくなし。よく教ふればしたがふ。夫れ三宝によりまつらば、何をもつてか枉れるを直うせん』の御意そのままであります。

この太子の憲法の源は勝鬘經と維摩經と法華經の体説、換言しますれば、仏智の働きてあります。が、それを感佩せられた場所は、太子の叔父君、崇峻天皇を殺害申した横暴極りのない蘇我馬子と共に政治を執らねばならないといふ、その難渋な場所でありました。若し太子が馬子を敵とされるなれば無限の修羅場と化し、若し太子が手を拱ぬいて傍觀されるのであれば馬子の横暴はつるばかりであります。そこに、太子はただ『篤く三宝に帰依し奉る』との白道一つを御自ら歩まれ、我等に教へ導いて下さるのであります。

寸のすき間もあれば救ひの光をとどけようとされる如来不断的御はたらきになぞらへることも出来ませう。

我等は幸にもかかる仏のましますことを聞かされ、救ひ無き身の救ひを、太子や聖人や、先生方に、切々哀々として告げしらしめて頂いてゐるのであります。かゝる教に遭ひ、斯る教を聞きまつることは、千劫、萬劫にも稀のことと承ります。

願はくば、近角先生のこの御提擧が、我々の全煩惱の生活の隅々までに徹し、同時に、現在只今の救済の成就せられんことを！

# 東方偈に就いて

(一)

福島政雄

東方諸仏国 其の数恒沙の如し  
彼の土の菩薩衆 無量覺に往觀したてまつる。  
南・西・北・四維 上・下も亦復然り  
彼の土の菩薩衆 無量覺に往觀したてまつる。  
南・西・北・四維 上・下も亦復然り  
彼の土の菩薩衆 無量覺に往觀したてまつる。

一切の諸の菩薩 各天の妙華  
宝香無伽衣をもたらして無量覺を供養したてまつる。  
威然として天樂を奏し 和雅の音を帳發し  
最勝尊を歌歎し 無量覺を供養したてまつる。

神通慧を究達し 深法門に遊入し  
功德蔵を具足し 妙智等倫無し。  
慧日世間を照し 生死の雲を消除す  
恭敬し繞ること三市して 無上尊を稽首したてまつる

今晚はたゞ今お読み頂きました東方偈と云はれたり或は往観偈と云つたりしてありますこの偈文を拝読しての私の感じを申し上げて見たいと思ひます。これはその偈文の前に、つまり偈文の内容になることを簡単に云つてありますところ

「仏、阿難に告げたまはく無量寿仏の威神極り無し」

あそこであります。その同じ文を悉しく繰り返し返してあるのがこの東方偈であります。この偈文の始めのところを考へまして、十方世界から菩薩達が無量寿仏の御許にまゐる。一体このことはどう云ふものだらう。

これについて私が非常に莊嚴に感じますのは華嚴經であります。始めの方を見ますとその十方世界から沢山の菩薩達が集つて来る、それを一一悉くその菩薩の数も御経の本で一百二百もずうつと菩薩達のお名前だけ書いてあると云ふやうな事になつてをります。その十方それ／＼集つて来る菩薩達をならべて集つて来る有様を述べられてあるのでありますから、あの華嚴經の始を読みますと何とも云へない莊嚴な感じに打たれますのであります。

といふ事になる、けれども十方世界の有情或は衆生と呼ばれる生きとし生けるものが悉くその阿彌陀仏の御命を中心として生々として併し非常な活動でありながら非常な静かさの内に大活動をする。これは前にも喩へて申し上げました様にコマが一心にまはつてゐる時には音もせず、それが殆んど動かぬ様にしてキーツとまうてゐる、あれが上上の活動の時であります。少し衰へて来ると傾いて来て如何にも動いてをると云ふ風に見えますけれども、心からまはつてゐる時には動いてゐるか動いてゐないのかわからぬ。あのコマの喩へて感じましたやうにこゝでも十方世界が阿彌陀仏の御命といふものを中心にして、全活動といふやうな大活動をしてゐるといふ姿であります。その大活動といふものが何とも云へない静けさの内に行はれてゐる。それでそこには天の妙華、何とも云へない華が降り下つて来る、これも天の妙華と云へば、法華經なんかを読みますと曼陀羅華・摩柯曼陀羅華・曼珠沙華・摩柯曼珠沙華とならべてありますが、つまり紅白の華が降り下つて来ると云ふところでありまして、それは法華經の解釈を讀んで見ますと華が降り下つて来るといふのは、その座の人の如何にも静に和いで一心になつてゐるといふ、その心持をさういふ風の表現の仕方でも云ひ現してあるのと云ふ風に述べられてあります。

だからこゝでもさうでありませう。天妙華を持つて来ら

ところが前から申してをります通りに、この無量寿經といふものは華嚴經を縮約したやうなものであると云ふことになつてをる。するとこの東方諸仏の国恒砂の如しと云ふところが丁度華嚴經の始めのところにあたるのでありますあの莊嚴な有様をこゝでは言葉は簡単に述べてありますけれども、こゝを讀んで華嚴經のあの場面が自然と私の心に浮んで来て実に莊嚴な感じに打たれます。

そこで少し理屈めいて来るかも知れませんが、一体菩薩達が十方世界から集つて来るといふのはどう云ふ事なのでありませうか。阿彌陀經の方でありますと、御承知のやうに六方世界の仏達が無量寿仏を讚歎し給ふ、かう云ふ事になつてをりますが、今これでは十方世界の菩薩達がそこに集つてまゐる、そして阿彌陀仏の所におまゐりする、この往観と云ふ言葉がこゝに出てをりますが、この言葉に就きましては昔の御講者の講釈なさつた本を讀んでみますと、この往観といふ事は結局往生といふのと同じことになる、それは親鸞聖人のかやう／＼のお言葉に依つてこの事がはつきりすると云ふやうなことを云はれてをります。だからつまり往生と云ふことになりまゝのであります。さうするといよ／＼かう云ふ事を私考へますがどうでありませう。十方世界から菩薩達が集つておいでになるといふ事は、十方世界の生きとし生けるもの、菩薩達はそれのおもなる方々

れるとそれがやはりハラ／＼と散つて来るといふ事を思ひ浮べて見る。併しそれは其処に全体の生きとし生ける人々がだ活動しながらお互の心は非常に和ぎ合つてゐると云ふ様なさう云ふところであるといふ事でありませう。そしてそこには芳香、何とも云へないいい香が満ち／＼とてゐると、それから無価の衣、無価と云ふのは始終お経に出て来る言葉でありまして、値段もつけられぬ様な貴い衣であります。無価といふと価値が無いといふ風に一寸聞えさうな言葉でありますけれども、もう価値付けのとも出来ない程に貴い衣である、さういふ物を持つて来られる、そして皆、無量覺、無量寿仏に供養されると、それはさうでありませう。大活動をしながら、つまり命が満ち溢れるやうになつてゐて、それが非常に和らぎの姿であつて、そこには喩へて云へば何とも云へない香が漂つてゐるのである、或は何とも云へない立派な衣をもつて包まれてゐるといふ様なさういふ世界がそこに現れ出でてゐると云ふところは、この阿彌陀仏を中心として世界の一切が大活動をしてそして無限の静けさの内にある。

そこに「威然として天樂を奏し」でありますからして、威然と云ふのはさうつと揃ふと云ふ意味ださうであります。これはお浄土の事を申しました時にお浄土の音楽と云ふものは何とも云へない本当に人の心をしんから静めて行くくと云ふ様な音楽のやうに感じますと云ふ事を申し上げま

したが、さう云ふ風の音楽であると考へてよいでありませう。そして「和雅の音を暢發し」でありますから和らいたく何とも云へない音、それが暢々と聞えて来る、そしてその音楽の内に「最勝尊を歌歎し」でありますから阿弥陀仏を歌を以て讚歎し奉る。

そして「無量覺を供養し奉る」と。この供養といふことでありますが今更ならぬ事ではありませんが、私共は供養するといふ言葉はよく使ふ言葉でありますが普通の人間に対する供養と云ひますと物を供養する食物を供養するといふ風の事になり勝ちであります。けれども今こゝに無量覺を供養し奉るといふその供養と云ふのはどんな供養でありませうか。つまり生々とした全活動の命をそのまゝに無量覺にさし上げてゐるのである、或はその無量覺の前に自然と自分が供へられてゐる、無量覺の命の中に私の命と云ふものが自然と全体としての供養申し上げると云ふ事になつてゐる。何か特別な食物を持つて行つて上げると云ふのではなしに自分の全生命がそこに投げ出されて無量壽仏の前に捧げられてゐると云ふ様なところが、無量覺を供養し奉ると云ふ心持ちでありませう。その供養し奉ると云ふのが繰り返されてゐる。そしてそれは一方から云へば往生である。この往生と云ふ言葉も始終私達つかふ言葉であるが、往つて生れる、無量壽仏のお浄土に往いて生れると云ふ事は、そこに命の働き、矢張り活動と云ふ事がこもつてゐる

時から考へてをりますのであります。真劍に遊戯する、真劍と云ふ事と遊戯と云ふ事とは一寸真反対の様に聞えます事でありませうけれども、この真劍に遊戯すると云ひます事、これが信仰の上の人生生活であると、これはあとでだん／＼はつきりなつてまゐります。真劍だけれども遊戯である、遊戯だけれどもどうでもよいと云ふ事でなくて真劍である。併し真劍であると云つて真劍だ／＼と云つて凄く血眼になつて人とぶつつかると云ふ様な事でなくて、真劍だけれど其処に遊戯だと云ふ余裕がある、さう云ふのがこの信仰生活であらうと云ふ様な事を私が西洋から帰りました頃に西洋ではソクラテスに大変感激しましてソクラテスの事を色々しらべ始めてをりましたのであります、そのソクラテスといふ偉大なる人にぶつつかつてみますと、あゝこの人は人生の生活と云ふ上に於ては真劍に遊戯して行つた人であると云ふ感じを持ちましたものであります。だからその頃からの私の感じでありますが今この「深法門に遊入し」、こゝを讀みますとこの遊入と云ふ言葉が味ひあるなど、つまり仏様は何とも云へない深い法門のおはいらになつてゐるけれども自分はその深い法門にはいつてゐるぞと云ふ事をちつともお考へになつてゐない、そこに何となく余裕があつてそしてまことの道にはいつておいでになる。私共になりますと少しいふ事をしたと思ひますと自分はこの立派な事をやつたといふ調子になり、それ

のであつて、往生即ち大活動であると云ふ事になるから往觀無量覺と云ふことは、所謂十方の光明に一味になつて一切の衆生を利益すると云ふ様な意気込みになつて大活動がある。しかもその大活動と云ひながら何とも云へない静な世界に於ける活動である。かう云ふ事になりまして全生命をそこに捧げての活動である。併し捧げてと云ふとちつと語弊があるかも知れませぬが、自然に私なら私の命がその無量覺の御前に投げ出されて自然とそれが供養になつてゐる。こちらから供養するのであると思つてゐないかも知れません。こちらから身を捧げるのであると思ふわけでもありません。けれども結局自分の身を捧げるといふ事になつてゐる。かう云ふ事なのであります。

そしてこれからその菩薩達が無量壽仏を讚歎されるお言葉になります。「神通慧を究達し」、この無量壽仏は非常な神通力のあるところの智慧の極致と云ふ所に立つておいでになる、そして「深法門に遊入し」、何とも云へない深い法門にはいつておいでになる、この遊入と云ふ言葉もよく私共が味はせられる言葉と思ふのであります。遊入、悠々としてはいつておいでになる、私はよくこの人生の姿、信仰の上に於ける人生の姿と云ふものはどう云ふものであるかと云ふ事を云ひ現すのにこれは真劍に遊戯すると云ふ事が信仰の上の人生生活の姿であると云ふ事を若い

が真劍な態度になつて人と衝突をする、血眼になるこんな事になり勝ちで道にはいつたといふ事は大嘘になつて来るのであります。そんな調子でなくて、「深法門に遊入し」、これは大変味ひのある所でありませう。それから「功德蔵を具足し」、諸々の功德をおさめ入れて十分に具へておいでになる、これもさうであります。功德を具へておいでになる、丁度蔵の中に一ぱい物がはいつてゐるやうに諸々の功德を身に具はし足らはしておいでになるけれども、自分は功德の蔵を持つてゐるぞと云ふ様な顔をなさつてゐるのぢやないと云ふ様な事になるのであります。「妙智等倫無し」と云ふのはさう云ふところであります。何とも云へない妙なる智慧、それは共に等しきものが無い、比べものがない様である。そうしてその「智慧の日は世間を照し給ふ」と。私共の生死の雲を消除し給ふ。生死の雲つまり煩惱の叢雲であります。それを消し除いて下さる、結局は消し除いて下さる。私なんかの心持で申せばもう一ぺんに消し除いて下さつてもう自分には生死煩惱の雲はないと、そんな事が云へた柄ぢやありませんから、結局は生死の雲を消除し給ふと云ふ様に受け取れますのであります。さういふ風に阿弥陀仏の御徳を讚歎して敬ひの姿を現して三度繞つてそして無上尊阿弥陀仏に御札を申し上げられる。

続く。



編集後記

春秋農繁の期となりました、念仏裡に存分の御働きを念じ居ります。念仏田植歌の故事も浮びます。

今年は南方伝の二千五百年祭で盛大な行事が行はれて居り、南北仏教の交流もしきりに企図せられて居ります。

この時、先日行はれた富山の花祭に出席し、長野の善光寺に参詣したセイロンの大使フオンセカ氏は、長野の商業高等学校の生徒全体に

『終戦後セイロンは日本に一円の賠償も要求せず、戦前の日本の財産もすつかり返しました。これは仏陀の、うらみはうらみなきをもつて止む、の大慈悲から出た親日的行為の発露である』と講話し、多大の感銘を与へたとの由であります。

我国では、聖徳太子の馬子に対し、又法然上人が殺害せられた父君の遺訓を履行せられたのもすでに、この大精神を實踐せられた方々であります。この教を忘れてゐる我等にセイロンの大使の口をとほして頂門の一針を蒙りま

した。

▽『思想解決の要鍵』の近角先生の御講話の原稿は、丁度福島先生の御辛勞によつて、先生の御一生を追憶させて頂いた月と、その先生の声咳をこの期に頂きたいものと思ひ、法蔵誌から転載させて頂きました。御心読願ひます。

▽『東方偈に就いて』は、従前の大経講話の続きであります。先生の長年にわたる御苦心の結晶として大経全体の御味ひの手引を頂けますことはほんとうに有難いこととあります。六月には五悪段について御講話下さいました。いづれ回を重ねて御膝下にお送り申します。

先生の近代思想と信仰(百華苑発行)が、近く独乙で出版せられることになりました。山田幸さんの腐心の翻訳にも深く謝して居ります。

東京都調布市仙川町七九四番地が御住所であります。

▽『近角先生の御提撕を頂く』の私稿は、先生の御教を我身の現在の上に信味させて頂くまを發表いたしました。皆様方も夫々に御身の上に信嘗して下さい。

五月十三日の日曜には仙台御在住の成瀬政男先生の御来庵を頂き、十四、

五分でありましたが、感激深い御感想を承りました。先生は齒車研究の第一人者、東北大学の教授、豊田自動車の顧問。学生時代から第二高等学校の阿刀田校長に親しまれ、近角常観先生の御導きを蒙られた方であります。昨年先生は独乙のベルリンで山田さんと会はれ、同信の友を見出し感慨無量、独乙のはてまでも私の慈愛の御手の延びてあつたことに驚喜せられた由であります。

五月二十日の夜、三重医大の川畑愛浩さん来庵。久瀧を謝し、談合に心温まり、時を惜みました。

定価	一部	十七円(送共)
	半年	百円(送共)
	一年	二百円(送共)
編集・発行人	花田正夫	
名古屋市南区千種区千種町馬走二八		
印刷人	奥川正生	
名古屋市南区千種区千種町二ノ二八		
発行所	慈光社	
振替口座名古屋一〇四七〇番		

慈光第八卷第六号昭和三十一年六月十五日発行 (毎月一回十五日発行) 昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可